

ヒヤリハットを収集して 事故を未然に防ぐアプリ開発

群馬県立高崎高等学校 1年 福田峻太

概要・背景

日記として日々のヒヤリハットを習慣的に書き込み、
AIによる解析によって、自分の危ない行動や傾向を減らすアプリを作る。

- よく事故りかける
> 事故を減らしたい
> 保険の授業でヒヤリハットを知る→
> 集めたら対策できるかもしれない！

ハインリッヒの法則 (1:29:300の法則)

1件の重大な事故の裏には、重大な事故に至らなかった29件の軽微な事故が隠れており、さらにその裏には事故につながらなかった300件の異常 (= ヒヤリハット) が隠れている、という法則



開発に向けて (実験・実装)

1. 目標

- ① 日記を書き続けることができる、快適なアプリ
- ② AIの報告を理解してもらえる、機能するアプリ
- ③ AIの報告が生活の中に生かされる、有効なアプリ

2. 構造

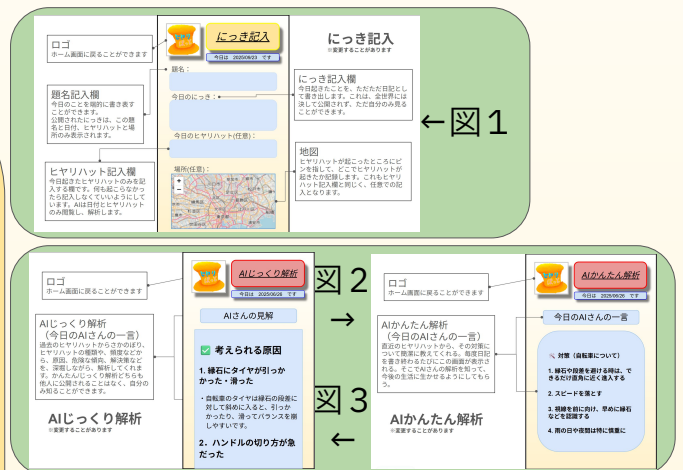
- ① 日記を書く → 図1 参照
- ② AIに送る → 図2, 3 参照
- ③ 危険を知る → 図2, 3 参照

3. 他社商品の差別化対策

<https://www.sei-info.co.jp/webdatabase/scene/adv-near-miss/>
上のサイトで、企業向けに似たことを商品として売り出している。

対策I [個人の中で完結できる]
自分の失態を他人に話すのはハズカシイ
> AIにのみ判断を任せるため、人に知らせることはない

対策II [日記として書き込むことができる]
忙しすぎてヒヤリハットを報告するのを忘れてた！
→ ヒヤリハットが集まらない
> 日記として習慣づけて書き込むことができるため、
長期間・多量のヒヤリハットが集まる



結果・今後の展望

アプリが完全にできていないため、結果はないが、
実装中に思ったことを書き出していく。

① AIのさらなる活用

日記に対して多少の抵抗がある
ヒヤリハットってどう書き込む？
> AIとの対話を通して、
より分かりやすい日記、
効果のあるヒヤリハットを作れる

② 商業化に向けて

商業化できていないと、
持続可能なアプリ開発にならない
> 収集したヒヤリハットを商品として
政府や企業に売り出す 図4 参照

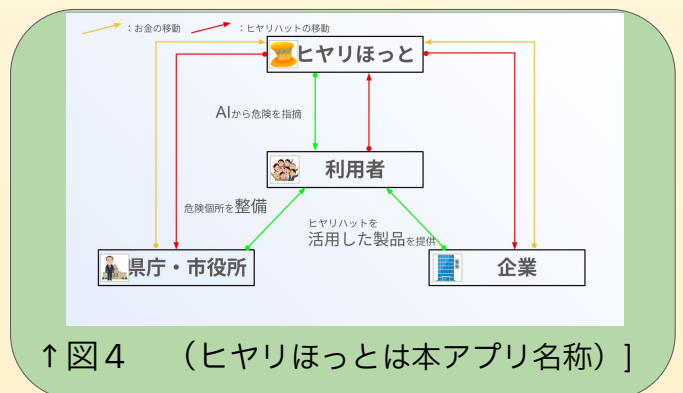
出典

ヒヤリハットを学んだサイト
企業的に似たことしている (再掲)

<https://www.sei-info.co.jp/webdatabase/scene/adv-near-miss/>

画像提供

<https://www.cm-net.co.jp/blog/near-miss-report/>



↑ 図4 (ヒヤリほっとは本アプリ名称)]